

亡き隣席の友 忘れない

犀川バス事故40年

生存者消えぬ自責の念

現場訪れ冥福祈る

慰霊碑のそばに建てられた地蔵に手を合わせる参列者(28日、長野市で)



長野市の国道で1985年1月、スキー場へ向かうバスがダム湖に転落し、日本福祉大(愛知県美浜町)の学生ら25人が死亡した犀川バス転落事故から40年となった28日、関係者が事故現場を訪れ、犠牲者の冥福を祈った。当時1年生だった生存者で、参列した香山久子さん(59)は、隣席の友人が亡くなったことに、今も自責の念にさいなまれており、「事故を風化させたくない」と話している。

(安田ななか、藤井健輔)



ダム湖から引き揚げられるバス(1985年1月28日、長野市で)

「こうした事故で同じ悲しみを味わう人が増えないようになってほしい」。この日、大学3年の長女と参列した香山さんは語った。バスは、スキー実習に参加する学生たちを乗せ、志賀高原のスキー場に向かって、香山さんは道中、隣の席に座ったせみ仲間で、「ミ

犀川バス転落事故 長野市の国道19号で1985年1月28日午前5時45分頃、日本福祉大の学生ら46人を乗せた貸し切りバスがスキー場へ向かう途中にカーブでスリップして犀川に転落。学生22人、教員1人、バス乗務員2人が死亡した。

ツチ」がニックネームの中嶋道子さんと高校時代やサークルなどの話をしながらバスに乗りこんでいた。休憩所で窓側と通路側の席を入れ替わる約束だったが、車酔いした香山さんはこのまままでいさせて、「窓際の席に座り続けた。ウトウトしていたところ、突然、「ドン」と衝撃を受け、浮遊感を覚えた後、バスに水が入ってきた。事故だと認識し、「どうにか出なきゃ」と窓のつまみを握ったまま意識が途絶えた。急に意識が戻り、なんとか勢いつけて車外に出て水をかき、水面上がると、友人たちがいた。「みんな助かったんだと安心して、草をつかみながら自力で斜面を登って地上に出た。夕方、報道で隣の席の「ミツチ」が亡くなったことを知り、「自分が助かったことで助からなかったのかも知れないと自分を責めた。事故を忘れない」という思いが強かった。

事故から約1年後、追悼文集を編んだ。亡くなった同級生の周囲から話を聞くうちに「彼らが生きていたという事実を皆に忘れられないようにしたい」という思いが芽生えたという。香山さんは「事故を風化させないため、次の世代に伝えていきたい」と語った。当時、同大職員でバスに乗りこんでいた生存者の津田道明さん(75)も法要に参列し、手を合わせた。

「生徒を助けられなかった」という葛藤を持ち続ける津田さんは、事故から3年後、法要で遺族に謝罪をした。非難されると覚悟していたが、「生きてくれてよかった」と肩をたたかれたという。2016年1月に軽井沢町で大学生ら15人が死亡するバス事故が起きた時は、「犀川のバス事故で食い止めたかもしれない」と悔しさを覚えた。事故を知る職員が退職を迎える中、津田さん

は2年間かけて事故を後世に伝えるための資料を作った。自身も退職を迎えた津田さんは、現在も同大の学生たちに向かって事故の講演を行っている。「事故を繰り返さないため、これからも遺族の悲しみや事故の悲惨さを伝えていく」と静かに語った。